

## 音楽学コースの歴史をふり返る

永井文音 愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（音楽学）

---

### はじめに

「ミクスト・ミューズ」は 2006 年度に創刊され、本年度で第 15 号目を迎える。今回、15 年という節目の年として、過去の卒業論文・修士論文・博士論文のタイトル一覧を掲載する特集を組むことにした。あわせて、2009 年度から始められた卒業論文パネル（詳しくは後述）も紹介する。

### 1. 卒業論文一覧

#### ・1997 年度

- |      |                                |
|------|--------------------------------|
| 飯島百合 | ドヴォルジャークの弦楽四重奏曲<br>—中期の作品を中心に— |
| 高田良子 | 歌舞伎《勸進帳》の研究—劇と音楽・音との関係—        |

#### ・1998 年度

- |       |                                       |
|-------|---------------------------------------|
| 荒川円   | 自閉症児の音楽療法<br>—重度自閉症児 4 人の治療実践を通して—    |
| 水本久美子 | 石川県押水町の獅子舞研究—獅子の分析を通して—               |
| 宮原靖枝  | 《ラプソディー・イン・ブルー》の研究<br>—コンチェルトにおける大衆性— |

#### ・1999 年度

- |       |   |
|-------|---|
| 小林ひかり | ベートーヴェンのピアノ作品の変遷と当時の楽器との関わり<br>—ソナタ Op. 2-3 と Op. 53 を比較して— |
| 関本淑乃  | リストの《パガニーニ大練習曲集》<br>—1838 年から 1851 年への変化—                   |

- 2000 年度  
 新井将之 ジョン・フィールドの『ノクターン』  
 小原道雄 18 世紀のホルン書法—協奏曲を中心に—  
 道下理恵 チャイコフスキーの組曲—交響曲創作との関係—
- 2001 年度  
 衛藤真奈美 日本のニュー・ウェイブ—戸川純を中心に—  
 守口香江 知的障害者のための音楽療法
- 2003 年度  
 鳥山頼子 プロコフィエフのオペラ《賭博者》Op.24  
 —ロシア語のデクラメーション・スタイルを中心に—  
 松宮圭太 スペクトル楽派の音楽  
 —トリスタン・ミュライユの『デザンテグラシオン』をめぐって
- 2004 年度  
 川原麻衣 名古屋のわらべうた『おせんべい』  
 —伝承過程における音楽的变化—  
 杵名明子 チャールズ・アイヴズにおけるアメリカ的要素  
 —交響曲第 2 番を中心に—  
 藤代円 蜷川幸雄演出『ハムレット』（1988 年）における音楽  
 —オフィーリア狂乱の場面を中心に—
- 2005 年度  
 成山明子 ラヴェルのオペラ『子供と魔法』  
 —坊やの心理的变化と音楽との関連性をを中心に—
- 2006 年度  
 今井千晶 ウジェーヌ・イザイ《無伴奏ヴァイオリン・ソナタ作品 27》  
 の書法—ヴァイオリン奏法の視点から—

- 大野悠子      ヘンデルのオラトリオ《サウル》における借用  
— 劇的要素との関連を中心に —
- 2007 年度
- 橋井久仁子      ヨハネス・ブラームス (1833 – 1893) 《51 の練習曲》  
— 技術的特徴とピアノ曲との関連性を中心に —
- 森本拓也      セロニアス・モンクの音楽的特徴  
— 『ラウンド・ミッドナイト』の分析から —
- 2008 年度
- 石原美早紀      障害児の音楽療法における音・音楽の使い方と音楽的特徴  
— 言語と動きへの働きかけを中心に —
- 蒲倉潤      J. シベリウスのヴァイオリン協奏曲 作品 47 に見る  
音楽様式  
— 交響曲第 2 番・第 3 番を中心とした比較・分析 —
- 2009 年度
- 近藤和真      ドビュッシーの歌曲〈星の夜〉にみるマスネの影響  
今井秀謹      公立文化施設の活性化について  
— 愛知芸術文化センターを中心に —
- 児玉直子      ムツィオ・クレメンティ研究  
— 練習曲集《グラドゥス・アド・パルナッスム》をめぐって —
- 齋藤香織      日本におけるベートーヴェン受容  
— 没後 100 年記念をめぐって —
- 2010 年度
- 片桐夏子      イタリア未来派音楽研究  
— バリッラ・プラテッラの作品を中心に —
- 野中亜紀      古代エジプトにおけるカイロノミスト  
— ハンス・ヒックマンによる先行研究の検証とそれに基づく分析 —

- 萩尾桃子      ルイ・ヴィエルヌとオルガン音楽  
 —オルガン交響曲第3番の分析を中心に—
- 深堀彩香      長崎県生月島のオラシヨの現在  
 —歌オラシヨ《ぐるりよざ》の分析を通して—
- ・2011年度
- 伊藤円      レベッカ・クラーク研究—その生涯とヴァイオラソナタを中心に—  
 榎原彩      “作曲家”宮沢賢治の誕生—宮澤賢治全集「歌曲」の項を中心に—
- ・2013年度
- 鈴木春香      プーランクのバレエ《牝鹿》  
 —音楽・歌詞・振付からの一考察—
- 畑陽子      革命後のキューバにおけるヌエバ・トロバ  
 —シルビオ・ロドリゲスの作品を中心に—
- ・2015年度
- 石川実希      アドルフ・アダンのバレエ《ジゼル》(1841)研究  
 —楽曲分析を中心とした音楽についての考察—
- 川島大輔      ジェラルール・グリゼー〈部分音 Partiels〉冒頭部の分析  
 —冒頭部における音響学からの影響を中心に—
- 木原雅代      初期学習者のためのヴァイオリン教則本研究  
 —『鈴木鎮一ヴァイオリン指導曲集』第一巻を中心に—
- 佐藤さくら      フィギュアスケート競技に用いられる音楽  
 —プログラムに用いられた楽曲の分析とその比較—
- 白井薫      シェーンベルクの音楽《幸福の手》研究  
 —その歴史的意義について—
- ・2016年度
- 江口麻依      ヴィクトリア朝イギリスにおけるコンサートの大衆性  
 —クリスタル・パレスの土曜コンサートを例に—

- 上堂蘭遼 「ONE OK ROCK」研究—日本のロック音楽史において—  
 杉山愛実 ミュージカル《エリザベート》の“宝塚化”  
 —ウィーン版と比較して—
- 辻雅滋 ジュゼッペ・ヴェルディの政治性  
 —カンタータ〈諸国民の讃歌〉(1862)のナショナリズムを中心に—
- 新田愛 シュニトケの多様式主義研究—アニメーション映画の視点から—
- ・2017年度
- 植野美濤 クヌート・ニーステッドの合唱作品研究  
 —無伴奏混声合唱作品を中心に—
- 村瀬優花 G. Ph. テレマンのオペラ研究  
 —ハンブルクで上演された作品の楽曲分析からの考察—
- 山下哲理 組曲《展覧会の絵》におけるホロヴィッツの音楽表現に  
 ついて—原曲とホロヴィッツ版の比較による考察—
- ・2018年度
- 河村璃子 ハワイの民族舞踊フラとその音楽の変遷  
 —商業化するフラとその伝統性—
- 永井文音 シューマン『音楽と音楽家』再考  
 —批評家としてのシューマン—
- ・2019年度
- 岡奈津実 ロシア民謡に基づくロシアの管弦楽曲  
 —チャイコフスキーを中心に—

## 2. 修士論文一覧

- 1995 年度
  - 加藤摩澄 ショパンのピアノ作品におけるルバート研究
  - 橋本百合 キャバレー音楽とオペラ—両世界大戦間のベルリンをめぐって—
  
- 1996 年度
  - 大西たまき シェーンベルクにおける音楽とテキストの関係  
— 12 音技法成立期の作品をめぐって—
  - 若林憲子 グレツキにおける簡素化のプロセス  
— 初期作品から交響曲第 3 番まで—
  
- 1997 年度
  - 高橋美奈子 シマノフスキーのピアノ作品  
— 《メトープ》Op. 29 と《マスク》Op. 34 をめぐって—
  
- 1998 年度
  - 高岡千寿子 ペンデレツキのクラスター作法—〈ダヴィデの詩篇〉(1958)  
から〈ヤコブが目覚めた時〉(1974) まで—
  
- 1999 年度
  - 長屋純子 ドビュッシーにおける「水」—オペラ《ペレアスとメリザンド》と  
《ピアノのための前奏曲集》をめぐって—
  
- 2000 年度
  - 松岡裕子 プーランクのオペラ《カルメル派修道女達の対話》における  
テキスト成立と音楽構造
  
- 2001 年度
  - 大戸薫 フォーレの音楽における「持続性」  
— 室内楽作品を中心に—

- 小林ひかり      グリーグの歌曲における民族性  
 —ヴィニエの詩による歌曲を中心に—
- 2002 年度  
 四元俊江      ブ람スの《ドイツ・レクイエム》Op. 45  
 —テキスト作成と音楽—
- 2003 年度  
 多賀奈央      シューマンの〈クライスレリアーナ〉Op. 16 と E. T. A.  
 ホフマン—初版と第 2 版の比較を通して—  
 中村由香里      フォーレの歌曲における詩と音楽  
 —《5つのヴェネツィアの歌》Op. 58 を中心に—
- 2004 年度  
 永津香      ショパンの作品におけるノクターンの要素
- 2005 年度  
 山口真季子      シューベルトの後期ソナタにおける主題と調性
- 2006 年度  
 鳥山頼子      プロコフィエフのバレエ《ロミオとジュリエット》Op.64  
 —音楽構造の分析を中心に—
- 2008 年度  
 大野悠子      音楽大学におけるアウトリーチ活動の必要性  
 —愛知県立芸術大学でのプログラム提案—
- 2009 年度  
 萩山陽子      中世・ルネサンス期のイギリス世俗音楽曲のディクシヨンの  
 分析—音楽構造と英語史の両面からのアプローチによる—

- ・ 2011 年度  
七條めぐみ      ゲオルク・ムッフアートの《音楽の花束》に見られる様式の混合
  
- ・ 2012 年度  
深堀彩香      Music and Jesuits in Japan and Macau  
: A Historical Overview from Sixteenth Century to Eighteenth Century  
穴倉奏      モーリス・ラヴェルの声楽作品研究  
— 歌曲集《シェエラザード》における詩法的— 一考察 —
  
- ・ 2013 年度  
八木宏之      エクトール・ベルリオーズ聖三部劇《キリストの幼時》研究  
— テクストの視点からの再考察 —  
加藤希央      新美南吉が聞いた音楽  
— 安城高等女学校教員時代の日記を手がかりに —
  
- ・ 2016 年度  
近藤広基      東海地方の学生オーケストラ楽団員の音楽活動に関する研究  
— アンケート調査を中心に —  
徐竹溪      2.5 次元ミュージカルの音楽に関する研究  
— ミュージカル「テニスの王子様」を例として —  
畑陽子      変容するレゲトン  
— キューバー人グループ、ヘンテ・デ・ゾーナを中心に —  
山本宗由      南葵音楽文庫の源流考— 南紀楽堂における演奏会を中心に —
  
- ・ 2019 年度  
所美樹      ウジェーヌ・ボザの《コンチェルティーノ》(1938) についての一考察  
— イベールの《コンチェルティーノ・ダ・カメラ》と比較して —  
村瀬優花      18 世紀前半までのハンブルクとブラウンシュヴァイクにおけるオペラ上演の実態と両劇場の関係性



### 3. 博士論文一覧

- 2012 年度  
 舨山陽子      ディクシヨンの視点によるヘンデル《メサイア》研究  
 —ヘンデルの歌詞付けの正当性—
  
- 2014 年度  
 森本頼子      シェレメーチェフ家の農奴劇場（1775～97年）における  
 トラジェディ・リリック上演  
 —フランス・オペラ受容からロシア・オペラの創出へ—
  
- 2015 年度  
 深堀彩香      音楽面からみるイエズス会の東洋宣教 —16世紀半ばから  
 17世紀初期におけるゴア、日本、マカオを対象として—
  
- 2016 年度  
 七條めぐみ    アムステルダムにおけるリュリのオペラの組曲版  
 —楽譜出版者エティヌヌ・ロジェ（1665/66–1722）に関する歴史、  
 文献、音楽面からの研究—

### 4. 卒業論文パネル

3月末に開かれる本学卒業演奏会で、音楽学コースの卒業生はロビーにて「卒業論文パネル」の展示を行う。一般の方に向けて自身の研究について発表する機会として、2009年度から毎年続けられている。

卒業論文パネルの展示では、「自分の研究対象について何も知らない相手」にも興味を持ってもらえること、視覚的にわかりやすいことが重要である。学内の研究発表とは異なる難しさがあるものの、過去の卒業生それぞれが、学部3、4年時に総合ゼミで学ぶ「インフォグラフィック」（情報やデータを視覚的に表す方法）の知識も活かし、工夫を凝らしたパネルを作成してきた。

次ページからは、2009年～19年の卒業演奏会で展示されたパネルから、一部を掲載する。

# 革命後のキューバにおけるヌエバ・トロヴァ

—シルビオ・ロドリゲスの作品を中心に—

畑 陽子

## キューバ／キューバ革命 (1959)



・1902年:スペインから独立  
米国の支配下に置かれ、多くの国民  
が親米政府による圧政に苦しめられ  
た。

・1959年:キューバ革命  
F.カストロらの武力闘争が勝利を収  
めたことで親米政府が崩壊。



・革命以降:米国との対立  
米国との関係が悪化し、米国はキュー  
バとの断交を宣言。キューバがソ  
連と協定を結んだことで完全な対立  
関係となる。さらにその後キューバは  
社会主義国家を宣言。

## ヌエバ・トロヴァ

革命後のキューバにみられる歌のジャンル、また、それらの  
歌に関連する音楽家たちの運動。最盛期は1970年頃～  
1985年頃。

### <先行研究におけるヌエバ・トロヴァ>

- ・社会科学的な視点から考察されることがほとんどで、  
音楽的側面から作品自体に焦点を当て、分析した研究  
は行われていない。
- ・当時キューバが米国と対立しており、社会主義国家で  
あったにも関わらず、ヌエバ・トロヴァのアーティストた  
ちの服装や演奏スタイル、使用楽器などに、米国文化や  
コマーシャルリズムへの傾倒が見られることが指摘され  
ている。このことは、しばしば革命政府への反抗の現れ  
であると考察される。

### 研究目的

- ・作品の分析によって米国音楽からの影響  
を具体的に示す。
- ・創作時期の異なる作品の比較によって、社  
会的変動に伴う作品の変化を考察する。
- ・社会的背景と作品の分析をもとに、ヌエバ・  
トロヴァの持つ性格を再考察する。

## シルビオ・ロドリゲス (1946-)



キューバのシンガー・ソングライター。  
専門的な音楽教育を受けず、独学によ  
って作曲・演奏を始めた。  
1969年、ヌエバ・トロヴァの活動母体と  
なる国営機関、音響実験集団GES  
(1969-1978)のメンバーとなる。  
ヌエバ・トロヴァの発展とともに成長し  
、現在ではキューバにおけるもっとも有  
名なアーティストの1人。

## 作品の分析

### 《銃対銃》(1967) / (1970)

シルビオ・ロドリゲスによって1967年に作られたこの作品は、も  
ととアコースティックギターの弾き語りで演奏されていた。  
1970年に、音響実験集団GESのメンバー(ロドリゲス本人も含む)  
によって様々な楽器を用い演奏されたアレンジバージョンが存在  
する。

### オリジナル・バージョン (1967)

- ◆冒頭に見られるベース・トゥンバオの音型



ベース・トゥンバオは、キューバ音楽の伝統的なリズム、クラベーと共通の  
アクセントを持つ。

- ◆クラベーのリズム



### GESアレンジ・バージョン (1970)

- ◆楽器編成

アコースティックギター  
フルート  
クラリネット  
ベースギター  
ピアノ  
コンガ  
ドラムセット

ベース・トゥンバオによって感じられるクラベーのリズムと並行  
してドラムセットが刻む8ビートには、米国のロック音楽からの  
影響がみられる。また、ピアノ/フルートの即興部分にはジャズの  
影響が見られる。

一方で、冒頭のベース・トゥンバオは変更されておらず、新たに加  
えられた8ビートによって印象は薄くなるものの、クラベーのリ  
ズムは失われていない。さらに、キューバの伝統的な楽器であ  
るコンガを編成に加え、コンガ・トゥンバオを演奏するなど、新  
たに加えられたキューバの伝統音楽的な要素もみられた。

## 研究結果

- ・ヌエバ・トロヴァのアーティストたちの活  
動や作品には、社会環境や自分たちの地  
位のめまぐるしい変化の中でも、変わら  
ず新しい表現を模索し続ける姿勢が見ら  
れた。
- ・一方で、キューバの伝統音楽的要素も失  
われていないことが明らかになった。そ  
のような点で、彼らのキューバ文化発展へ  
の意識が感じられた。
- ・1970年代以降は、キューバが外国との交  
流を重視していたことから、外国音楽の要  
素とキューバの伝統音楽の要素の積極的  
な使用は、諸外国の聴衆を視野に入れた  
作品づくりでもあったと考えられる。

## アドルフ・アダン《ジゼル》(1841)研究 — 楽曲分析を中心とした音楽についての考察 —

石川 実希

### 研究目的

《ジゼル Giselle》は、1841年にパリのオペラ座で初演された。初演以来、《ジゼル》は、バレエ作品として高い知名度と評価を誇る作品であり、現在でも多くのバレエ団によって上演されている。それにもかかわらず、音楽に着目した先行研究は少ない。そこで、本研究では、バレエ音楽の幕開けともいえる《ジゼル》の音楽の楽曲分析を行い、再評価することを目的とする。

### 第1章 アダンの生涯と彼のバレエ作品

アドルフ・アダン Adolphe Adam (1803-1856)

- ・フランスの作曲家。
- ・1820年：パリ音楽院に入学。オルガン、対位法、作曲を学ぶ。
- ・1825年：ローマ賞 2等賞を受賞。
- ・劇場音楽を得意とし、生涯に39のオペラと、14のバレエ音楽を残す。



アダン



《ジゼル》の舞台

### 第2章 《ジゼル》の作品概要

- ・ロマンティック・バレエ(1830-40年代のフランス・ロマン主義のバレエ)の代表作。
- ・ポワントやロマンティック・チュチュの魅力が発揮されている。
- ・台本作家、振付師、舞台監督、作曲家等が相互に意見を出し合い作品を仕上げた。
- ・子どものピアノ教則本で知られるブルクミュラーによる楽曲も一部挿入されている。



ブルクミュラー

### 第3章 楽曲分析

- ・登場人物や感情を表す13のテーマを、場面に合わせて使用している。
- ・楽曲は2種類に分類できる。

#### (1) ストーリーのための音楽

- ・頻繁な拍子、テンポ、調性が変化
- 登場人物の動きや心情を反映

#### (2) 踊りのための音楽

- ・8小節のフレーズを基本とした一定の拍子、テンポ、調性の楽曲
- 踊りやすい構成の楽曲になっている

① 薔薇収穫の村人のテーマ	② セラリオンのテーマ	③ 花占いのテーマ	④ ジゼルのワルツのテーマ	⑤ ウイリを予感させるテーマ	⑥ 貴族のテーマ	⑦ 舞踏もたずテーマ	⑧ ジゼルとロイスのバド・ドゥのテーマ	⑨ 狂乱のテーマ1	⑩ 狂乱のテーマ2	⑪ ウイリたちの呪いのテーマ	⑫ ウイリたちの踊りのテーマ1	⑬ ウイリたちの踊りのテーマ2
---------------	-------------	-----------	---------------	----------------	----------	------------	---------------------	-----------	-----------	----------------	-----------------	-----------------

13のテーマ一覧

場	あらすじ	テーマ
第1場	導入	
第2場	セラリオン登場	①、②
第3場	アルブレヒト登場	
第4場	ジゼル登場、ロイスと愛を語らう	③
第5場	ジゼルと村人たちの踊り	①、④
第6場	ジゼルの母ペルト登場	④、⑤、⑥
第7場	セラリオン再登場	②、①'
第8場	貴族一行の到着	⑦、①、④、⑦、⑧
第9場	セラリオンがロイスの正体を突き止める	②
第10場	アルブレヒトの不安	楽曲なし
第11場	ジゼルとロイスのバド・ドゥ	⑧、⑨、⑩
第12場	ジゼル発狂	⑨、⑨'
第13場	ジゼルの死	③、⑧'、⑩、⑩'

第1幕の楽曲分析

場	あらすじ	テーマ
第1場	導入	⑤、⑧、⑤'
第2場	セラリオンが森を訪れる	⑩
第3場	ミルタの踊り	
第4場	ウイリたちのコールド・バレエ	⑪、⑫、⑬
第5場	ウイリになったジゼル登場	
第6場	通りかかった村人をウイリたちが襲う	⑬、⑬、⑬
第7場	アルブレヒトが森を訪れる	
第8場	アルブレヒトのもとにジゼルが現れる	
第9場	ジゼルとアルブレヒトの踊り	
第10場	セラリオン、死とウイリたちの踊り	⑭、⑮、⑯'
第11場	ジゼルがアルブレヒトを守る	楽曲なし
第12場	ジゼルとアルブレヒトの別れ	③、③'、⑩'、⑩'
第13場	貴族一行がアルブレヒトに駆け寄る	楽曲なし

第2幕の楽曲分析

### 結論

テーマや楽曲の構成の工夫により、バレエ音楽としての完成度が高い点から、《ジゼル》は、バレエ作品としてだけでなく、その音楽も評価に値すると改めて述べる事ができる。

# ミュージカル《エリザベト》の“宝塚化” ーウィーン版と比較してー

杉山 愛実

## 研究目的

宝塚歌劇では、オリジナル作品のほか、海外ミュージカルを“輸入”して上演することがある。そのような作品が、原作である海外ミュージカルと比較してどのように変化しているかを明らかにする。

## 第1章 宝塚歌劇の歴史とすみれコード

- ・1914(大正3)年創立。
- ・1967(昭和42)年、宝塚歌劇団初の海外ミュージカル《ウエストサイド物語》を上演。
- ・1996(平成8)年、海外ミュージカルの第5目となるミュージカル《エリザベト——愛と死の輪舞——》を初演。

すみれコードとは…「清く、正しく、美しく」の宝塚の理念にそぐわない内容のものを避けるべきという掟のこと。

- ・非日常的な夢の世界を表現するため、観客に実像を見せてはならない。
- ・本名、年齢などを公言することや、品位に欠ける発言をすること、男役がスカートを履くこと、恋愛の話をすることはタブー。
- ・下品、暴力的、過激な描写がされる演出やセリフ、歌詞は、演出家により表現を緩和されたり避けられたりする。 etc...

## 第2章、第3章 ミュージカル《エリザベト》におけるウィーン版と宝塚版の比較

ウィーン版《エリザベト Elizabeth》  
脚本・歌詞 ミヒャエル・クンツェ(1943~)  
作曲 シルヴェスター・リーヴァイ(1945~)  
1992年 アン・デア・ウィーン劇場で初演

宝塚化

宝塚版《エリザベト——愛と死の輪舞——》  
脚本・歌詞 ミヒャエル・クンツェ(1943~)  
作曲 シルヴェスター・リーヴァイ(1945~)  
演出 小池徳一郎  
1996年 宝塚大劇場で初演(雪組)



ウィーン版ミュージカル「エリザベト20周年記念コンサート〜日本スペシャルバージョン〜」ドイツ語上演(日本語字幕つき)



宝塚歌劇団花組公演「エリザベト——愛と死の輪舞——」

### 演出面に見られる宝塚化

- ① 主役の変更(エリザベト→トート)
- ② トートのビジュアルの変更(人間的→非人間的)
- ③ トートの役割の改変(影→革命を先導)
- ④ エリザベトの性格の改変(強かな王妃→儂いヒロイン)
- ⑤ 登場人物(革命家エルマー、シュテファン、ジュラ)の追加
- ⑥ エピソードの改変

### 構成面に見られる宝塚化

- ① ハンガリー独立運動(第2幕第9場)の追加
- ② 皇帝が娼館を訪れる場面(第2幕第6場)の変更
- ③ エリザベトが病で倒れる場面(第2幕第7場)の変更
- ④ エリザベトが皇帝の裏切りを知る場面
- ⑤ エリザベトを非難する姉ゾフィーのナンバーの削除
- ⑥ ナチスを彷彿とさせる「HASS(憎しみ)」の場面の削除

### 音楽面に見られる宝塚化

- ① 調の変更
- ② 歌詞の省略
- ③ パート・フレーズの分割

## 結論

ウィーン版ミュージカル《エリザベト》は、すみれコードをはじめとする様々な宝塚の事情を汲み、宝塚仕様に変更された。宝塚版《エリザベト——愛と死の輪舞——》は、ウィーン版の単なる「日本語上演版」ではなく、「宝塚独自の作品」となったといえる。

# G. Ph. テレマンのオペラ作品研究

## —ハンブルクで上演された作品の分析からの考察—

村瀬 優花

### ゲオルク・フィリップ・テレマン Georg Philipp Telemann (1681-1767)

1681年	マクデブルクに生まれる
1701年	ライプツィヒ大学に入学
1702年	学生たちで構成されるコレギウム・ムジクムを創設
1705年	ポーランドのゾーラの宮廷楽長になる
1708年	アイゼナハの宮廷楽長になる
1712年	フランクフルト・アム・マインの市の音楽監督と教会の楽長になる
1721年	ハンブルク市の音楽監督とヨハネウム（ラテン語学校）のカントルになる
1722年	ゲンゼマルクト劇場のオペラ監督になる
1737-38年	パリ旅行
1767年	ハンブルクで亡くなる



### 研究目的

テレマンのオペラは一般的なレパートリーとして上演されることはなく、研究もほぼされていない  
 ⇒ 作品自体に焦点を当て、詳細な分析を行う  
 分析の結果からテレマンのオペラ作品の歴史的意義を考察する

## 第1章 ハンブルク時代のテレマンとオペラ作品

- 1678年、ゲンゼマルクトに当時ドイツ語圏では初の市民向け歌劇場が創設される
- テレマンはハンブルク時代に作曲家、劇場監督、カントル、出版者として活動していた
- 現在わかっているテレマンのオペラは33作品あり、ゲンゼマルクト劇場で作曲された22作品のうち8作品のスコアが現存している
- 1721年から1744年までのゲンゼマルクト劇場でのテレマンのオペラ上演記録から、ハンブルク市議会議員の専用公演が複数回行われていたこと、パリ旅行の時期から上演が著しく減ったことがわかる

## 第2章 分析

- 第1節 《忍耐強いソクラテス》(1721年)
- 第2節 《当節はやりの恋人ダモン》(1724年)
- 第3節 《ピンピノーネ》(1725年)

- 序曲を持ち、レチタティーヴォとアリアが交互に配置されたイタリア・オペラに倣う構成である
- 台本はイタリア人作家による原作の翻案であり、一部または全部がドイツ語に翻訳されている  
 →言語混合の場合：全てのレチタティーヴォとアリア数曲がドイツ語
- 哲学者やギリシャ神話を題材として扱いつつも内容は世俗的である
- 1740年頃に生まれるオペラ・ブッフアの特徴が見られる  
 →滑稽な役柄のグループと真面目な役柄のグループの共存、バツソ・ブッフォの使用

ドイツ語の歌詞を持つ曲の一例  
 《忍耐強いソクラテス》第2幕 No. 20 恋敵同士のプロディセツェとエドロニカの二重唱

RODOLPH: Anfänge  
 Bar-schön-je dich für mich, ent-ich-je dich für mich, für mich.  
 ERONICA: Ent-ich-je dich für mich, ent-ich-je dich für mich, für mich.

- 同じ音型で掛け合う
- 一方が4分音符の拍上で同じ母音が重なるように書かれている  
 →響きを美しくする工夫

## 結論

- ナポリ派のイタリア・オペラを土台としつつ、ゲンゼマルクト劇場の大衆向けという性質に合わせて作曲されている
- 演出を助ける音楽面での工夫、効果的に使われる二重唱の掛け合いの組み立て、ドイツ語歌詞の音節の処理が優れている

# シューマン『音楽と音楽家』再考

—ジャン・パウル『美学入門』からの影響

4年 永井文音

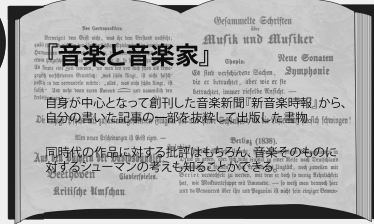
ロベルト・シューマン Robert Schumann (1810-1856)



「音楽家には、音楽だけでなく、言葉や文字を通して活動することを促すための機関を手に入れることが不可欠であるように思われる。」

「我々は、それ自身だけでも印象を残すと同時に、示唆に富んだ原曲について思い起こさせるような、そんな批評が最高のものだと考えている。」

『新音楽時報』より



自身が中心となって創刊した音楽新聞『新音楽時報』から、自分の書いた記事の一部を抜粋して出版した書籍。

同時代の作品に対する批評はもちろん、音楽そのものに対するシューマンの考えも知ることができる。

## 美学の基礎

作品の受け手の解釈に重きを置く  
美は「語ること」によって価値を増すという考え

ジャン・パウル Jean Paul (1763-1825)



ドイツロマン派時代の小説家。

5つの主要作品をはじめとして、気まぐれでユーモアに富んだ独自の文学作品をつくりあげた。

理論書『美学入門』では、自身の小説美学について語っている。

「美についての無味乾燥な事象的説明では、それ以上に達することはできない。詩的な美によって、絵画美、彫刻美さえもますます高く輝くことがある。」

「空想は部分的な世界を一つのまとまりのある世界にするし、すべてを、無限の一切をも、総体化する。」

『美学入門』より

